

附属三原学園は今

自筆を語る①

附属三原学園の前身は一九〇九年に設立された広島県立女子師範学校の附属校です。

一九一一年（明治四十五年）年に小学校が、一九一三年（大正二年）年に幼稚園が、一九四七（昭和二十二年）年に中学校が設立されました。途中で、広島県立女子師範学校とともに広島大学に移管され、教育実習生の指導・教育研究・地域社会への貢献という三つの柱のもとに活動しつつ、今日に至っています。現学園長は新制十代目、中西稔学校教育学部教授です。

幼稚園

副園長 木原純子



一九九三（平成五年）年三月までに三二五四名の卒園生を送り出した附属幼稚園ですが、園庭には、設立以来と思われる大きなヒマラヤ杉や藤棚があり、いつも子どもたちの声でにぎやっています。ヒマラヤ杉や藤の枝に登ったりぶら下がったり、大王松の大きなマツボックリ・藤のまめ・ドングリな

ど木々の実を使っていろいろなものを作ったり、園庭は彼等にとってはすばらしい遊び場であり材料です。

本園を卒園された方たちが、時々、懐かしがって、幼稚園を訪問されますが、園庭に立つと、自分たちの幼いころに遊んだ姿と現在の子どもの姿を重ね合わせながら思い出を語られます。特に、「たなのふじづる」をするのびて」と園歌として歌われたり子どもたちの四季折々の遊びを見守り八十年以上も立つ藤棚は、幼き日の姿を強烈に思い起こさせるようです。

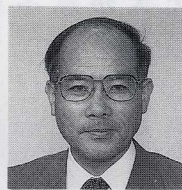


春のふじの花、初夏の青葉、秋の紅葉、落葉した木々の間からこぼれる暖かい冬の陽射し、自然をいっぱい含

たのしいな 水遊び

小学校

副校長 浦島 啓



附属三原小学校の玄関に入ると大きな額を目にします。一九二四（大正十三年）年に作られた自伸会（公立では児童会のこと）の信条です。
一、私たちは 私たちの力でのびていこう
一、私たちは 人のために尽くして感謝しよう
一、私たちは 私たちのきまりを尊重しよう

んだ園庭で元氣よく遊ぶ子どもたち。彼らの遊びは、自由で創造的です。四季折々、自由に遊ぶ中で子どもたちの育ちが見えます。新教育要領でも、環境を通して行う教育の大切さが言われていますが本園では何十年も、自由遊びを大切にしながら、保育を進めています。人間は生まれながらにして、自然に成長していく力と同時に周囲の環境に対して自分から能動的に働きかけようとする力を持っています。子どもたちは、砂場でトンネルを作ったり、水路を作ったり、ままごとをする中で、いろいろなことを試したり工夫したりしながら、日々育つていきます。

いつも園庭では自由に遊びながら、いきいきとした子どもたちの声が響いています。（きはら・じゅんこ）

これは、当時の時代背景（大正デモクラシー）の中で子どもを中心とする教育精神から創り出されたものです。その後の附属三原小の研究が子どもと教師の心の通い合いをもとに、子どもを中心とする教育の在り方を追い求めていくように、この信条が私たちの教育に大きな影響を与えています。と同時に、このことは今後も変わることのないものと思われまます。

今、小学校では新指導要領の指針のもと教育実践が展開されています。ここでは、子どもの体験を重視し、そこから知性化を図ろうとしています。さて、体験という言葉から学校ではキャンプ・宿泊訓練・修学旅行・運動会・文化祭・水泳訓練など教室や親元を離れて活動することが想起されますが、附属三原小では、本校でしか体験できないことの一つとして「塾教育」を持っています。

この活動は、一九四四年から始められ今日まで約五十年間続いて来ています。（宿泊施設は終戦まぎわの物資のない苦しい時代に保護者が持ち寄り力を合わせて建ててくださったそうです。残念なことにはいたみが激しく、現在は撤去されています。）当時の先輩たちの意図は「教育は教室の中で知識だけを伝えるものでなく、教師と子どもとの心の通い合いの中でなされるもの」と捉えられ、その実践化だったそうです。

「塾教育」というのは世間で考える学習塾のことではありません。子ども

（学級の四分の一にあたる十人位）と担任の先生が一泊二日〜二泊三日の日程で宿泊施設（現在は教育実習生の研修施設である景雲ハウス）に泊まり込んで生活をともにする活動です。



「これ誰が作ったの。おいしそう!」

子どもたちは、学校を終えるとき景雲ハウスに急ぎ、部屋の掃除・お風呂の準備・トイレの掃除・買い出し・夕食の準備・その片付け・入浴・勉強・就寝など、自分たちで考えて作ったスケジュールを分担してやり遂げていきます。この時、教室ではおとなしいと思われていた子が意外に指導性を発揮し、てきぱきと夕食の準備をしたり、元氣よく走り回っていた子が何をしていたのか分からずにしょんぼりしていたりと日頃見せてくれていた姿とは全く異なる姿を見せ驚かせてくれます。

また、分担された仕事をする時、家庭の話や家に帰ってからの自分の様子を生きた話と話します。もちろん、教師も家庭で生活している姿を子どもたちに見せます。お互いが学校では見せ

ない姿を見せることによって人間としての心のつながりをつくっています。この活動ゆえとは言えないかもしれませんが、学園を出た後もしばしば集いお互いの交流を深める活動が盛んです。一つの伝統は一朝一夕にできるものではありません。地域の人の暖かい支援と学校と子どもが一つになってお酒を造るがごとく長い時間をかけて造られるものです。

暖かい心がつながっていく伝統は、ぜひ残し受け継いでいきたいものです。（うらしま・あきら）

中学校

副校長 信實洋介



中学校では、本年度より新しい学力観に基づく教育課程が実施されています。

本校では、数年前より新しい学力観にかかわる研究に取り組み、本年の六月の研究会では過去三年間の研究成果を「学ぶ心をはぐくむ」という刊行物に著し、発表しました。

その主な骨子は、
（一）学ぶことの価値に気づく授業づくり（学習することの意義をつかみ、開かれた価値に向かって学び続ける生徒を育てる。）
（二）他との関わりを深め、自己を生かす授業づくり（他との関わりを大切

にして集団で学ぶことの喜びを共有する授業のあり方）
（三）学ぶ自己を見つめる授業づくり（自己の学習のあり方を問い続け、吟味し、創造的に生きる生徒を育てる。）

今、子どもたちに求められているものは変化の激しい社会を、柔軟にたくましく生きていく力です。その源は意欲・意思といった子どもたちの心の中にあるものであり、それらを学校教育の中でどのようにして育てていくかが大きな課題になっています。幸いにも、附属三原学園には、十五年来取り組んでいる「自己表現活動」を中核とした授業づくりがあります。

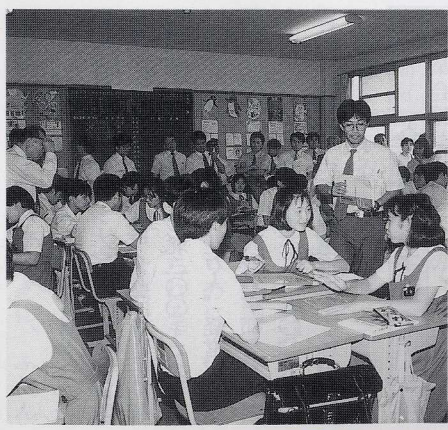
これは、人間の持つ五感を鍛え、集中力をつけて環境を受け止め、想像する力によって、それを身体や言葉で豊かに表現させるものです。そのことによって豊かな感情と知性の結合を図っていくこととするものです。みずみずしい感性に裏打ちされ、表現力豊かで意欲的な生徒の育成を目指しています。

このことは、現在研究している新しい学力観を明らかにしてゆく大きな手懸かりになるものと考えています。さらに研究を深め、その内容を充実させたいと考えています。

ところで、附属学校が教育研究の先導的な試みを世に問うことは当然のことですが、地域の教育への貢献も見逃してはなりません。

本校では、広島県よりここ数年一、二名程度研修生を受け入れ、研究活動の支援をしています。子どもがおり、学級があり、理論と実践を一体にして研究を進められることが研修者には好評です。特に、職員集団が研究会に向かって研究を進める姿を実際に目にすることができるとは、研修者には附属での研修の財産になるようです。

微力ですが、広島県の教育はもとより、教育の発展のためにお役に立てればと考えています。（のぶさね・ようすけ）



社会科課題学習の授業

以上、「附属三原学園は今」ということで学校を紹介いたしました。三原という地に住む人々の暖かい理解と援助、先輩たちが時代の要請を受け止めつつも真なる教育は何かと問い続けて実践を進められて来た努力、これらが今日の附属三原学園の源にあることを執筆者自身再認識できたことに感謝したいと思います。